

日本の母親の乳児との共同注意と関わりに関する研究： 2017-18年と1994-95年に生まれた乳児に対する母親の言葉 かけの比較検討

寺見 陽子

神戸松蔭女子学院大学教育学部

A Study of the Joint-attention and Interactions Between a Mother and an Infant in Japan: A Comparison of Mothers' directed speech to Infant Born Between 2017-2018 and 1994-1995

TERAMI Yoko

Faculty of Education, Kobe-Shoin Women's University

Abstract

本研究は、共同注意時における対乳児への母親の発話を、語彙面と育児語に着目し、2017-18年と1994-95年に生まれた乳児とその母親の比較を行い、今日の母親の言語的かわりの課題を明らかにすることを目的とした。

1994-95年に生まれた9か月児とその母親4組（女児2名、男児2名）、1歳児とその母親3組（女児2名、男児1名）、2017-18年に生まれた9か月児とその母親4組（女児3名と男児1名）、1歳児とその母親3組（女児1名、男児2名）の計14組が本研究に参加した。被験者の自宅における自由遊びを30分VTRに収録し、遊び場面における共同注意、母親の発話と発話のタイプ、品詞と語彙の使用、育児語・幼児語の使用について分析を行った。その結果、共同注意は、1994-95年の母親と2017-18年の1歳児の母親において有意な減少がみられた。その共同注意は、母親主導で子どもに向けられることが多かった。一方、発話数は、1994-95年に生まれた9か月児の母親が有意に多かった。また、発話タイプは、9ヶ月児では1994-95年の母親は模倣と促し・相槌が有意に多く、2017-18年の9ヶ月児の母親は応答が有意に多かった。1歳児においても、1994-95年の母親は促し・相槌が有意に多かった。幼児語・育児語については、育児語の使用率はいずれの母親もほぼ同率であったが、幼児語の使用率には差がみられ、1994-95年の母親の方が高い比率であった。この結果を踏まえ、課題について論議した。

The purpose of this research is to explore the mothers' joint attention and verbal interactions with their infant children in order to highlight the deterioration of the qualitative interactions between parents and children. The study compared verbal interactions of mother and infant dyads of children born between 2017-2018 and 1994-1995 (7 pairs each, a total of 14 pairs) by videotaping 30 minutes of free play in their respective homes. The videotaped data was transcribed and the frequency of word utterances (syntactic unit) and units of conversation were counted. A comparison of this data suggests a decline in frequency of joint attention, utterances, urge/agreement 2017-2018 compared to 1994-1995 among 1-year-olds. Overall frequency of utterances was the highest among the mothers of 9-month-olds in 1994-1995. The mothers in 1994-1995 uttered imitation and backchanneling more than other types of utterances while the mothers in 2017-2018 uttered responses the most. The mothers in 1994-1995 employed baby talk in higher frequency than the mothers in 2017-2018. The results suggest that in order to enhance the quality of mother-child interactions, mothers' verbal interactions and ability to express themselves need to be improved.

キーワード：9か月児の母親、1歳児の母親、発話、発話タイプ、育児語・幼児語

Key Words: 9-month-old-infant mother, 1-year-old-infant mother, utterance, utterance type, infant directed speech

【目的】

筆者は、母親と乳児の視覚的共同注意に注目して、2017-18年と1994-95年に生まれた9か月の乳児とその母親の行動を比較し、今日の母親の対乳児への関わりの変化とその特性について検討した(寺見, 2019)¹⁾。本研究の結果では、視覚的共同注意には有意な差は認められなかったが、母親の働きかけに関する項目のほとんどにおいて、1994 - 95年の母子よりも2017-18年の方が減少しており、特に発話数は2017 - 18年の母親の方が1994 - 95年の母親より少なく、二分の一となっていた。

共同注意の成立は、「母親—乳児—モノ」という三項関係を構成する基盤となり、乳児のコミュニケーションや言語の発達を促す契機になる。また、その成立過程では、乳児は目の前の母親の声や言葉、表情とともに、自分自身の声や表情にもさらされる(Bruner, 1982)²⁾。こうした状況において与えられる言語は、乳児にとって意図や意味を即座にとらえやすい。15カ月時と21カ月時との母子の玩具遊び場面を比較したトマセロら(Tomasello & Farrar, 1986)³⁾の研究では、共同注意中の方が、共同注意をしていない時よりも、母子ともに発話が多く、母親は短い文章で情報を提供し、会話を長く続ける傾向があることを明らかにしている。また、子どもが見ているものに母親が言葉かけすることが、21カ月時点での語彙数と正の相関があり、子どもの注意をそらすような言葉かけは負の相関があることも見出している。さらに、ボーンシュタインらは(Bornstein, Tamis-LeMonda, & Haynes, 1999)⁴⁾は、養育者の応答性の高さ(即座性、随伴性、適切さ)が20カ月時の子どもの算出語彙数の多さや50語の獲得と関連することを示している。

しかし、ホフら (Hoff & Naigges, 2002)⁵⁾ は、共同注意中の母親の発話の多さや応答性は、子どもの語彙の発達増加と関連しないという。彼らは、10 か月～29 カ月の子どもの母子遊びを10 か月間隔で2回観察し、母親の発話内容を分析している。母親の語のタイプの多さ、発話の多さや応答性は、2回目の子どもの語彙発達には関係なく、母親の発話のタイプ多さ、平均発話長に見られる母親の発話の複雑さが、子どもの語彙発達と正の相関があることを見出している。

これらの研究は、初期の言語発達において、子どもへの母親の語りかけとその在り方が重要であることを示唆している。また、様々な他者との関わりや、やり取りの中でふと耳にする会話 (overhearing) を通して言葉は学習されていることも明らかにされている (Gampe, Liebal, & Tomasello, 2012)⁶⁾。前述の筆者の研究において、今日の母親の語りかけが減少しているという結果は、今日の子どもの言語発達への影響が危惧される。今日の母親の対乳児への言語的関わりとその質についてさらなる検討を要する。

養育者が乳幼児に話しかけるときの、音声面、語彙面、文法面、語用面で独特の言葉かけをする。それらは、マザリーズ、育児語 (baby talk)、乳幼児に向けて話す言葉 (infant directed speech) と呼ばれる。こうした言葉かけは、子どもの初期の言語発達に重要な役割を果たす。小椋 (2015)⁷⁾ によれば、この期の言葉かけには、ピッチが高い、ピッチが変化しやすい、誇張したストレスがあるなどの韻律的な特徴があり、子どものポジティブな情動の表出を促し、子どもの覚醒状態や行動をコントロールする力があるという。それは、言語を理解しない時期でも、会話をしているような順番交替や双方向のやり取りをつくることを可能にする。この期の言葉かけには、まるで意図的なコミュニケーションをしているように乳児を扱い、反応を引き出す働きがある。そのようにして、養育者は、乳児と相互交渉をしながら周りの事物や事物の変化を一緒に探索し、その場の文脈や事物の行為の特徴に言語的なラベルリングを行い、乳児がそれらに関心を持つように促す。こうした養育者の行為は、乳児との共同注意を引き起こし、それがきっかけとなって、言語の獲得が促される。

このように、共同注意は、「養育者—子ども—モノ (事物)」という三項関係の成立を促し、これが言語発達の基盤となる (Bruner, 1983/1988)⁸⁾。したがって、共同注意中の養育者の豊富な言語入力や多様な発話が、子どもの言語の発達には重要である。

村瀬 (2006)⁹⁾ は、日本の養育者の育児語の特徴として、情緒的な志向性が高い、情報志向性が低い、育児語が多い、質問が少ない、モノの受け渡しなどの社会的なルーティーンに関する発話が多い、感嘆詞をよく使用するなどの特徴があることを明らかにしている。さらに、村瀬ら (1998, 2007)¹⁰⁾ は、16～27 カ月時の親の子どもへの言い方を分析している。その結果、親は、擬音語擬態語〈わんわん、ぼーん等〉、員音の反復〈かみかみ (かむ)〉、接尾辞〈さん、ちゃん、くん、及びその変形〉の付加、接頭辞 (お) の付加〈おさかな〉、音の省略〈やだ (いやだ)〉、音の転用〈にゅーにゅー (ぎゅうにゅう)〉という特徴をもつ育児語を多く使用し、動物、乗り物、飲食物、衣類、身体各部、動作、性質など多岐にわたる対象・事物に対して育児語を用いていたことを報告している。

また、小椋らの研究 (2019) では、9、12、14、18、21、24 ヶ月児の母親の発話の対乳児

発話面に現れた特徴を検討した結果、育児語は子どもが語と対象の間の恣意的な結びつきのルールを学習する足場づくりの役割を持っていることが、明らかにされている。さらに、14か月児の母親の育児語が33か月時の成人語表出語数を予測していたことから、乳児終期の養育者の育児語が、2歳前後の言語発達に影響するとしている。一方、ファーナルドら (Fernald & Morikawa, 1993)¹¹⁾ は、6、12、19か月児の日米の母子を比較し、日本の母親は、すべての月齢でオノマトペをよく使用し、より長い期間育児語を用いていること、あいさつややり取り、共感などの社会的な慣用句を米国の母親より優位に高く使用していることを見出している。さらに、米国の母親は自立を促すのに対し、日本の母親は相互依存を奨励し、やさしく話しながら摸倣し易い言葉を用い、子どもに合わせて情緒的なコミュニケーションをとる特性を見出している。

このように、これまでの研究では、共同注意と養育者の対乳児への発話、育児語が、乳児の言語発達に影響することが明らかにされている。そこで、本研究では、養育者の乳児に対する発話、語彙、育児語に着目して、2017-18年と1994-95年に生まれた乳児の母親の言葉かけの比較を行い、今日の乳児の言語発達を促す養育者の言語的かかわりの課題について一考することを目的とした。

【方法】

(1) 対象

1994-95年に生まれた9か月の乳児（男児2名、女児2名）の母親4名、1歳の乳児（男児1名、女児2名）の母親3名、2017-18年に生まれた9か月の乳児（男児1名、女児3名）の母親4名、1歳の乳児（男児2名、女児1名）の母親3名、計14名の母親（男児5名、女児9名）を研究対象とした。

(2) 手続き

研究への協力が得られた被験者の自宅を訪問し、日常使用しているおもちゃを用いて母子が遊んでいるところを30分VTRに録画した。録画に際しては、母親にできるだけいつものように遊ぶように依頼した。

(3) 分析方法

1) 共同注意行動分析

撮影した30分のうち後半10分を分析対象とした。VTRを10秒ごとに区切り、分析した。分析コードは、黒木・大神(2003)¹²⁾の尺度を参考に作成した。コーディングは心理学を専攻する2人の観察者によって行われ、一致率は平均80%であった。観察項目は、①発声 ②情動表出 ③叙述的身振り ④共同注意 ⑤大人の視線 ⑥子どもの視線 ⑦接触 ⑧指さしを設定した (Tab.1)。

Tab.1 コーディング項目と定義

コーディング項目		定義
発声	大人開始	母から声をかける
	子の応答	子どもがそれに応答する
	子開始	子から声をかける
	母の応答	母がそれに応答する
子の情動表出	快	子どもの快表出
	不快	子どもの不快表出
母の情動表出	快	母の快表出
	不快	母の不快表出
叙述的身振り	A: 母から子へ物の提示 / 手渡し	A 子どもから母親への物の提示ないし手渡し A に応じた母親の反応。
	A に応じた子の反応	
	B : 子から母へ物の提示 / 手渡し	B 母親から子どもへの物の提示ないし手渡し し、B に応じた子どもの反応
	B に応じた母の反応	
視線	同時注視 (二人同じ物を見る)	子どもと母親が同じ物ないし人を見ている
母の視線	視線追従 (子ども)	母が子どもの視線を追う
	おもちゃ (自分=母)	母が自分の持っているおもちゃを見る
	おもちゃ (子ども)	母が子どもの持っているおもちゃを見る
	子どもの顔	母が子どもの顔を見る
	子どもの体	母は子どもの体を見る
子の視線	視線追従 (母)	子どもが母の視線を追う
	おもちゃ (自分=子)	子どもが自分の持っているおもちゃを見る
	おもちゃ (大人)	子どもが母の持っているおもちゃを見る
	大人顔	母の顔を見る
	大人体	母の体を見る
接触	大人から接触	母から子どもにスキンシップする
	子どもから接触	子どもから母にスキンシップする

2) 発話分析

母子の発話のトランスクリプションを作成し、発話数（統語的切れ目）、発話のユニット（遊びのテーマ）、品詞の使用頻度、育児語と幼児語の使用頻度を分析の対象とした。これらを分析の対象にしたのは、先行研究によって、これらが乳児期の言語の発達と関連することが明らかにされているからである。具体的な項目設定と分析方法は、小椋（2019）¹³⁾の研究を参考にした。すなわち、①発話のタイプ（呼びかけ、促し・相槌、命名、説明叙述、要求、摸倣、拡充摸倣、質問、オノマトペ、感嘆・感動、禁止、発声、笑い、疑問、その他）、②品詞（名前、名詞・固有名詞、代名詞、数詞、動詞、助動詞、助詞、形容詞、副詞、連体詞、応答、感嘆詞、相槌、オノマトペ、接続詞）、③育児語と幼児語、の頻度を算出し、①は総発話数で、②は総語彙数で、③は成人語と育児語・幼児語の総数で除した数値を用いて分析を行った。

なお、品詞分析にはインターネットのアプリを用いた¹⁴⁾。

頻度の算出は2人の分析者によって別々に行われ、それぞれに分析後、一致度の検討を行った。発話単位タイプと発話トークは場面のニュアンスの問題があり、分析者の解釈によって異なることが予想されたため、一致率の算出よりも、解釈に関する検討を行い、不一致の内容に関しては合議によって決定した。

(4) 倫理審査

本研究はK大学倫理審査委員会の承認を得た後、各対象児の親に対し研究開始時に研究の目的と内容、実施方法、プライバシー保護に関する説明を行い、承諾書に署名を頂いた。また研究者側からも説明した内容に関する書類に署名し、協力者に手渡した。なお、1994-95年の観察は、当時倫理審査委員会がなかったため、研究目的と内容を協力者に説明し、合意を得たうえで実施した。本研究にあたり、再度連絡をとり、データの使用と発表について同意を得た。

(5) 統計処理

ここでは、1994-95年の母親と2017-18年の母親の平均値の差の検定を行った。分析には、IBM SPSS Statistics Ver.26を使用した。

【結果】

データの分析は、2017-18年に生まれた9か月児の母親群（以下A群とする）、1994 - 95年に生まれた9か月児の母親群（以下B群とする）、2017-18年に生まれた1歳児の母親群（以下C群とする）、1994-98年に生まれた1歳児の母親群（以下D群とする）に群分けし、T検定による比較検討を行った。その結果、次のようなことが明らかになった。

1. 共同注意について

共同注意については、共同注意の頻度、共同注意が向けられた方向（母親のおもちゃか、子どものおもちゃか）、その共同注意が起こった時の相互的なやり取りの頻度について検討した。分析に際しては、観察された行動総数で共同注意の頻度を除し、生起率を算出して用いた。

その結果、C群とD群の共同注意の頻度において有意な差が認められた ($t=-3.993$, $df=4$, $P < .05$)。また、共同注意が向けられた方向についても、C群とD群では、D群の頻度が高い傾向にあった ($t=-2.338$, $df=4$, $P < .10$)。1994-95年の母親の方が、圧倒的に共同注意が多く、また、その注意を向ける方向も、子どもの持つものに向けられることが多かった。しかし、9か月児のA群とB群間で、その差異は認められなかった (Tab.2・Tab.3)。

Tab.2 共同注意・やりとりの生起率

コード	群	A n=4		B n=4		C n=3		D n=3	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
C 玩具共同注意		0.035	0.009	0.025	0.011	0.035	0.015	0.073	0.021
M 玩具共同注意		0.037	0.022	0.032	0.025	0.019	0.016	0.025	0.023
共同注意合計		0.072	0.018	0.202	0.300	0.055	0.011	0.096	0.006
共同注意時のやり取り		0.040	0.062	0.006	0.003	0.005	0.000	0.019	0.012
子主導発声		0.021	0.011	0.037	0.031	0.027	0.011	0.032	0.004
母主導発声		0.078	0.015	0.087	0.017	0.092	0.007	0.077	0.013
子主導発声やりとり		0.011	0.004	0.015	0.016	0.012	0.012	0.018	0.007
母主導発声やりとり		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.004	0.004
発声		0.099	0.020	0.124	0.016	0.119	0.018	0.109	0.010
発声やり取り		0.029	0.041	0.015	0.016	0.012	0.012	0.022	0.005
母主導モノの差し出し		0.033	0.022	0.036	0.024	0.022	0.019	0.031	0.018
子主導モノの差し出し		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.002
母主導モノのやりとり		0.015	0.012	0.022	0.021	0.014	0.011	0.021	0.018
子主導モノのやりとり		0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.001	0.002
モノの差し出し行為		0.034	0.022	0.037	0.024	0.022	0.020	0.032	0.018
モノのやりとり		0.015	0.012	0.022	0.022	0.014	0.012	0.010	0.010
母主導接触		0.047	0.025	0.041	0.030	0.018	0.014	0.021	0.018
母主導の相互接触		0.022	0.026	0.026	0.028	0.004	0.004	0.023	0.020
子主導接触		0.030	0.032	0.040	0.028	0.007	0.004	0.016	0.014
子主導の相互接触		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
接触		0.145	0.181	0.081	0.054	0.023	0.020	0.037	0.032
相互接触		0.022	0.026	0.026	0.028	0.004	0.004	0.011	0.012

Tab.3 1歳児の母親の共同注意の平均値の差の検定結果

	群	M	SD	T 値
共同注意	C n=3	32.667	6.658	-3.993*
	D n=3	55.333	7.234	
子どものもつ玩具をみる	C n=3	21.000	8.718	-2.524+
	D n=3	41.667	12.583	
母親のもつ玩具をみる	C n=3	11.667	9.074	-2.524+
	D n=3	14.333	13.796	

* P<.05 + P<.10

2. 発話について

発話については発話数、発話のユニット、発話に用いられた品詞と語彙、育児語・幼児語、発話単位のタイプについて分析を行った。その結果は下記の通りであった。

(1) 発話と発話タイプについて

母親の発話頻度を算出し、観察時間で除した数値を用いて、発話のタイプの分析を行った。その結果、発話数は、A群とB群間でB群の方が高い傾向にあった。(t=-2.290, df=4, P<.10)。すなわち、1994-95年に生まれた9か月児の母親の発話数が多かった(Tab.4)。

発話のタイプについては、算出された頻度を発話数で除した数値を用いて分析した。その結果、9か月児の母親では、応答(t=2.874, df=4, P<.05)と模倣(t=-3.130, df=4, P<.05)において、A群とB群の間に有意な差が認められた。応答はB群の方が多く、模倣はA群の方が多かった。また、促し・相槌では、A群の方が多い傾向にあった(t=-2.33, df=4, P<.10)。1歳児の母親では、促し・相槌において、D群の方が多い傾向にあった(t=2.060, df=4, P<.10)(Tab.4)。

Tab.4 発話と発話タイプの平均値(頻度)

	9か月				1歳			
	A n=4		B n=4		C n=3		D n=3	
	M	SD	M	CD	M	SD	M	SD
発話数	87.50 ⁺	10.25	108.67 ⁺	97.43	100.33	30.66	108.67	97.43
遊びのテーマ数	5.25	2.87	6.33	3.21	3.67	2.08	6.33	3.21
呼びかけ	8.75	3.77	10.67	10.26	7.67	7.37	10.67	10.26
促し・相槌	8.00 ⁺	2.16	10.67 ⁺	9.81	6.33 ⁺	3.21	10.67 ⁺	9.81
命名	4.75	4.92	7.67	10.79	2.00	1.00	7.67	10.79
説明叙述	32.00	13.49	30.33	25.01	40.33	23.18	30.33	25.01
要求	2.75	3.59	5.00	6.24	8.00	6.56	5.00	6.24
応答	11.25 [*]	6.65	5.00 [*]	6.24	9.67	1.15	5.00	6.24
模倣	0.50 [*]	0.58	2.00 [*]	3.46	0.00	0.00	2.00	3.46
質問	12.50	4.12	21.33	19.66	18.33	5.51	21.33	19.66
オノマトペ	13.50	9.68	15.00	17.06	14.67	6.03	15.00	17.06
感嘆・感動	4.50	3.32	8.67	4.16	7.00	1.73	8.67	4.16
禁止	2.00	4.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
発声	4.25	5.97	1.67	2.89	0.33	0.58	1.67	2.89
(笑)	5.00	4.24	5.67	3.21	6.33	5.51	5.67	3.21
疑問	3.50	4.36	4.67	4.62	3.00	2.65	4.67	4.62
発話タイプ数	113.25	19.64	129.33	110.39	123.67	42.71	129.33	110.39

* P<.05 + P<.10

(2) 品詞の使用と育児語の使用

品詞は、全語彙数で除した数値を用いた。幼児語・育児語については、幼児語は成人語と幼児語の合計頻度、育児語は成人語と育児語の合計頻度で除した数値を用いて分析を行った。その結果、品詞の使用、幼児語・育児語の使用に有意な差は認められなかった (Tab.5・Tab.6)。

Tab.5 品詞の使用頻度 (上段頻度、下段語彙数で除した数値)

品詞	9 か月児				1 歳児			
	A n=4		B n=4		C n=3		D n=3	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
語彙数計	449.500	195.155	294.000	108.824	308.333	254.602	345.000	233.707
名前	17.250	18.301	15.250	6.702	11.333	14.012	13.333	17.214
名前%	0.067	0.050	0.055	0.025	0.040	0.014	0.027	0.021
固有名詞	71.500	52.564	45.250	25.773	42.000	43.313	30.333	27.647
固有名詞%	0.143	0.048	0.148	0.059	0.137	0.059	0.080	0.017
代名詞	19.500	14.059	11.000	4.243	16.667	10.693	20.333	11.150
代名詞%	0.038	0.015	0.043	0.021	0.067	0.038	0.063	0.032
数詞	8.500	12.450	7.500	13.699	4.000	6.083	0.667	1.155
数詞%	0.020	0.017	0.045	0.049	0.020	0.028	0.003	0.006
動詞	73.750	47.120	36.750	20.839	40.333	31.214	92.333	78.233
動詞%	0.153	0.048	0.118	0.029	0.147	0.047	0.250	0.046
助動詞	28.000	14.213	25.000	21.401	20.333	17.214	39.333	43.085
助動詞%	0.063	0.015	0.073	0.044	0.070	0.020	0.097	0.047
助詞	97.000	63.755	48.500	28.349	57.333	59.769	50.000	21.656
助詞%	0.200	0.060	0.155	0.039	0.173	0.047	0.163	0.040
形容詞	19.250	10.046	12.250	9.535	12.000	13.892	4.333	0.577
形容詞%	0.055	0.044	0.040	0.026	0.033	0.015	0.020	0.010
副詞	12.000	14.071	7.500	6.455	14.667	9.713	9.000	5.000
副詞%	0.025	0.024	0.023	0.017	0.050	0.017	0.030	0.020
連体詞	2.000	1.826	0.500	1.000	1.000	1.000	0.000	0.000
連体詞%	0.007	0.006	0.010		0.010	0.014	0.000	0.000
応答	61.750	17.970	55.750	18.319	44.000	32.140	49.667	35.105
応答%	0.165	0.090	0.205	0.091	0.147	0.099	0.143	0.021
感嘆詞	14.500	5.323	7.750	5.123	25.667	21.595	13.333	4.041
感嘆詞%	0.038	0.013	0.030	0.014	0.073	0.040	0.047	0.023
相槌	0.750	0.957	1.250	0.957	1.667	2.082	2.333	2.517
相槌%	0.000	0.000	0.007	0.006	0.005	0.007	0.020	0.014
オノマトペ	21.750	15.240	19.500	14.201	17.333	16.623	17.000	16.093
オノマトペ%	0.055	0.044	0.088	0.078	0.047	0.023	0.053	0.067
接続詞	2.000	1.826	0.250	0.500	0.000	0.000	3.000	3.000
接続詞%	0.007	0.006	0.000		0.000	0.000	0.010	0.010

統計的な有意差は認められないが、育児語・幼児語の使用率を比較してみると、全体的に育児語の使用率が高く、幼児語については、2017-18年の母親よりも1994-95年の母親の方が使用率が高かった (Fig.1)。

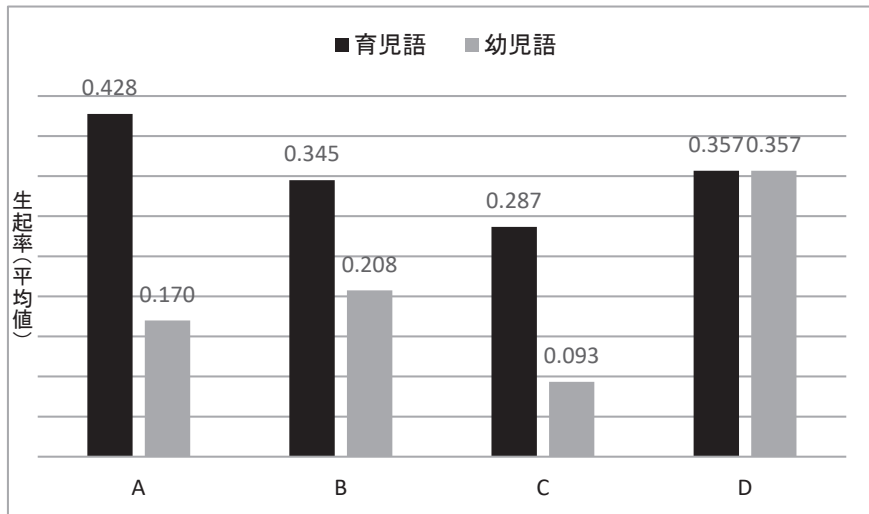


Fig.1 育児語・幼児語の使用率

Tab.6 9か月児の母親の育児語・幼児語

	A n=4		B n=4		C n=3		D n=3	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
育児語	24.000	15.599	46.000	20.347	28.667	23.798	37.000	38.354
育児語%	0.428	0.415	0.345	0.259	0.287	0.300	0.357	0.287
幼児語	11.250	3.594	34.000	20.897	12.667	12.423	49.667	69.292
幼児語%	0.170	0.130	0.208	0.046	0.093	0.029	0.357	0.316

【考察】

本研究では、養育者の乳児に対する発話、語彙、育児語に着目して、2017-18年と1994-95年に生まれた乳児の母親の言葉かけを共同注意と比較検討し、今日の母親の対乳児への言語的かわりの課題を明らかにすることが目的である。

本研究の結果、次のようなことが明らかになった。共同注意は、1994-95年の母親と2017-18年の母親で差が見られ、1歳児において有意な減少が見られた。また、その共同注意行動は、母親主導で子どもに向けられることが多かった。一方、発話数は、1994-95年に生まれた9か月児の母親が有意に多かった。その発話タイプは9ヶ月児の母親では、1994-95年の母親は、模倣と促し・相槌が有意に多く、2017-18年の母親は応答が有意に多かった。1歳児の母親においても、1994-95年の母親は促し・相槌が有意に多かった。幼児語・育児語については有意

な差は認められず、育児語の使用率はいずれの母親もほぼ同率であった。しかし、幼児語の使用率には差が見られ、1994-95年の母親の方が高い比率であった。

今日の母親の共同注意行動の減少や発話数の減少は、乳児との視線共有やコミュニケーション、言語のオーバーヒアリングの機会の減少を意味する。今回の研究では、乳児の言語発達の状態をアセスメントしているわけではないので、母親の言語的かかわりが乳児の発達行動にどのように影響するかをここで論じることはできないが、従来の研究が明らかにしている結果を参照すれば、何らかの影響を及ぼす可能性が危惧される。

また、発話のタイプでは、1994-95年の母親が促し・相槌が多いのに対し、2017-18年の母親は応答が多い。乳児からすればどちらも重要な関わりではあるが、促し・相槌は母親主導の関わりであるのに対し、応答は、子ども主導のかかわりである。ポジティブに解釈すれば、子どもの動きに応じた子ども主体の関わりと言えようが、これが多いということになると、子どもの動きを後追いついて関わることになり、ネガティブに解釈すれば、子どもからの動きがないと関わらないともいえるであろう。それは、「模倣」が有意に少ないという結果からも推察できる。今回のビデオ分析時に行動観察するなかで感じ取られたことであるが、2017-18年の母親はどちらかと言えば自分から積極的に子どもにかかわるというよりは、子どもを見守ることが多く、子どもが動けばそれに応じて母親も動くといった傾向が見られた。乳幼児の発達にとって、あらゆる面で大人は重要な環境であり、母親主導のかかわりは、月齢が低ければ低いほど重要である。今回の研究結果が示唆する課題は、母親主導の乳児との言語的かかわりを促すかかわりの重要性とそのあり方、乳児を見守り後追いつく関わりだけでなく、乳児の動きを引き出す母親のかかわりの解発の必要性である。

本研究では、被験者が少なく、統計的には有意であったとはいえ、その妥当性が十分とはいえない。また、標準偏差が示すように、個人差が激しく、今回の結果が母親の特性によるものである可能性もある。今後さらなる検討を要する。

謝辞：本研究の調査にご協力くださいました赤ちゃんとその保護者の皆様に心よりお礼申し上げます。データ収集と分析に関して、本学心理学科の久津木文教授、榊原久直准教授、大阪保育総合大学の小椋たみ子教授から貴重なご助言を賜りました。特に、大阪保育総合大学の小椋たみ子教授には、論文作成においても貴重なご助言とご指導を賜りました。心より感謝とお礼を申し上げます。分析においては、元神戸松蔭女子学院大学大学院生の山下千尋様・米田なお子様・吉川つつみ様、サロステラ事務局手島加代子様のご協力を頂きました。皆様、本当にありがとうございました。

追記：本研究は平成28年度科研費基盤研究C（課題番号：16K01899、研究代表者：寺見陽子）による研究の一部である

【引用文献】

- 1) 寺見陽子. (2019). 日本の母親の乳児に対するかかわりの変化とその特性—2017-18年と

1994-95年に生まれた乳児とその母親の行動比較を通して－神戸松蔭女子学院大学研究紀要8人間科学部編) 123-134

- 2) Bruner, J. (1982). Formats of language acquisition. *American Journal of Semiotics*, **1** (3),1-16.
- 3) Tomasello, M., & Farrar, M., J. (1986). Joint attention and early language. *Childe Development*, **57**,1454-1463.
- 4) Bornstein,M.H., Tamis-LeMonda, C.S., & Haynes, O.M. (1999). First words in the second year: Continuity, stability, and models of concurrent and predictive correspondence in vocabulary and verbal responsiveness across age and context. *Infant Behavior and Development*, **22**, 65-85.
- 5) Hoff, E. & Naigles, L. (2002). How children use input to aquire a lexicon. *Child Development*, **43**, 418-433.
- 6) Gampe, A., Liebal, K., & Tomasello, M. (2012). Eighteen-month-olds learn novel words through overhearing. *First Language*, **32**, 385-397.
- 7) 小椋たみ子. (2015). 養育者はどんな語りかけをしているか. 小椋たみ子・小山正・水野久美. 乳幼児期のことばの発達とその遅れ. ミネルバ書房. 93.
- 8) Bruner,J.S., (1983/1988). *Child's Talk.: Learning to use anguage*. Oxford University Press. (寺田晃他訳. 乳児の話しことば—コミュニケーションの学習. 新曜社.)
- 9) 村瀬俊樹. (2006). 子どもの語の獲得における養育者のことばの役割. *心理学評論*, 49 (1), 45-59
- 10) 村瀬俊樹・小椋たみ子・山下由紀恵. (2007). 養育者における育児語使用傾向の構造と育児語使用を既定する要因. *社会文化学論叢*. (島根大学法文学部紀要社会文化学編)
- 11) Fernald, A., & Morikawa, H. (1993). Common theme s and cultural variation in Japanese and American mothers' speech to infant. *Child Development*, **64**, 637-656
- 12) 黒木美沙・大神英裕. (2003). 共同注意行動尺度の標準化. *Kyushu University Psychological Research*, Vol4, pp203 - 213
- 13) 小椋たみ子・増田珠巳・浜辺直子・平井純子・宮田 Susanne. (2019). 日本人母親の対乳児発話の語彙特徴と子どもの言語発達. *発達心理学研究*, **30** (3), 153-165
- 14) 品詞アプリ URL : hinshibunruiki://

(受付日 : 2021. 12. 9)